

セザンヌとマネ — その芸術的競争をめぐる一考察 —

東北大学 工藤 弘二

ポール・セザンヌ (1839-1906 年) の初期作品群は、近年になってその価値が見直されている。その中にはマネを意識して制作された作品が少なくない。当時の前衛の先駆者であるマネに尊敬の念をもつっぽうで、モネ、ヴォアールなど同時代の証言からはマネを非難する姿が伝えられている。このようにセザンヌはマネにたいして称賛と反発が入り乱れた矛盾した意識を持っていた。

セザンヌとマネの関係はこれまでも、クルト・バット、メアリー・ルイズ・クルムリーヌをはじめ、多くの研究者によって繰り返し指摘されている。しかし両者の関係についての具体的な考察は必ずしも十分とはいえない。本発表では従来断片的にとりあげられてきたこの問題を、風景の中に人物を配した作品群を中心として再検討し、セザンヌがマネに向けた複雑な競争の意識を具体的にたどりたい。最終的には、これまでマネとの関係ではほとんど語られてこなかった《漁師たち》(個人蔵、1875 年ころ) の制作意図を明らかにする。

セザンヌがマネを意識して制作した、風景の中に人物を配した作品群にかんして、従来の研究では《草上の昼食》(オルセー美術館、1863 年) を中心として論じられるのが常であった。いっぽうでこれまで見過ごされてきたのがマネの《漁獲》(メトロポリタン美術館、1861-63 年) である。この作品は 1867 年に開催されたマネの個展に展示されたものであり、その当時パリに滞在していたセザンヌが目にした可能性は十分にある。構図またはモチーフ — 釣り人、カップル、犬 — が、セザンヌの《魚釣りの場面》(所蔵先不明、1868-70 年) や、《草上の昼食》(個人蔵、1870 年ころ) でも反復されており、これらの作品ではマネに対する言及は直接的なものであるといえることができる。

ところが第 3 回印象派展に出品された《漁師たち》になると事情は一変する。マネの《漁獲》に見られる漁る人と舟というモチーフを踏襲しながらも変更を加え、《牧歌》(オルセー美術館、1870 年) で使用した独自の構図の中にそれらを翻案している。この作品には、後年に顕著となるセザンヌの造型上の、そして色彩上の特徴の萌芽をはっきりと見てとることができるため、マネの影をとりはらったといえることができる。この《漁師たち》には、第 1 回印象派展に出品された《モデルヌ・オランピア》(オルセー美術館、1873-74 年) 同様、マネに対する競争の意識が表明されているのではないだろうか。

加えて、マネの《漁獲》には画家本人の姿が描き込まれている。セザンヌがマネを意識して制作した作品群にも画家自身の姿が描かれる場合が少なくない。マネが芸術家としての自らのイメージをどのように提示し、またそれに対してセザンヌがどのように応答したのかという点にも留意しながら、セザンヌのマネに対する葛藤の軌跡を提示していきたい。